

検査値を見て病態を診断 オンラインワークショップも開催!

大学院医歯薬学研究所 保健学域 准教授
山下 理子 (やました みちこ)

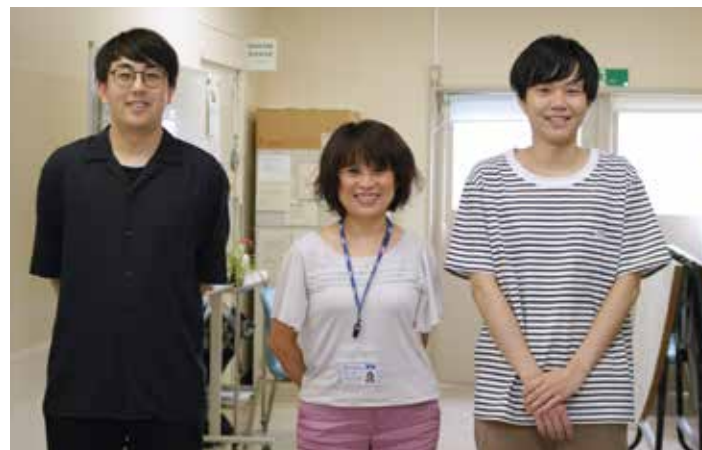


臨床検査の8名の先生がオムニバス形式で行う臨床検査学入門。その中で山下先生が担当された「検査値解釈法」は「徳島赤十字病院方式検査値解釈実践」と題し、オンラインで行われました。検査値解釈法は検査の値だけを見て病態を診断するというのも、推定される疾患をもれなく挙げて、次の検査の想定をしたり、医師だけでなく、いろいろな職種の人が意見を出し合うことができるので、瞬時に難しい判断を行わなくてはならない医療現場でも活用されています。

授業もテーマごとの班に分かれ、検査値を項目ごとに見ながら、お互いに意見を出しあい、検査値から病態を診断するトレーニングを行いました。今回、授業に使った検査値は信州大学病院方式に山下先生が独自に血圧などのバイタルサインをプラスした「徳島赤十字病院方式」というもの。山下先生が徳島赤十字病院に在籍されていた頃に使われ始めたため、その名付けられました。これまで検査値や臓器や顕微鏡の写真を見て、病理学的な

診断を行うワークショップをおこなっていた山下先生。2016年、中四国の医学科の病理学教室から126名が参加し、開催された日本病理学会中国四国支部主催「病理夏の学校 in 徳島」。山下先生が担当した教育型CPCでも検査値解釈法のワークショップを行い、好評を博しました。その翌年は医学科、保健学科、初期研修医、検査技師などいろいろな人が参加できる「蔵本パソロジー勉強会」を開催。今年度も9月にオンラインで行い、今年

も対象を全学に広げて実施出来ないか、検討中という事です。「将来的には検査値とバイタルサインを使って、種々の危険性を自動表示できる方向へ進むのではと考えています。スマートフォン健康アプリ等も実用化されていますが、医療現場で本当に必要な道具はまだ無いように思います。まずは、検査値とバイタルサイン解析を知り、有効性についてエビデンスを積み重ねることが大切だと考えています」。



取材時、卒論の相談に来ていた医学部保健学科 湯浅凌雅さん(左)、秦耕太さん(右)と。「僕たちの頃は検査値解釈法の授業がなかったので、羨ましいです」と話す2人。



第36回日本臨床栄養代謝学会学術集会以信州大学 本田孝行先生(信州大学病院方式考案)とRCPCのシンポジウムの様子。オンラインで発表する山下先生。



2017年に行われた蔵本パソロジー勉強会の様子(写真左)。その他のワークショップの資料も大切に保管されています。

医学科授業日程2,3コマ目に、 オンラインワークショップ開催!

10月19日(火) 8:30-12:00 医学科 病理学 (I, II) 特別講義
病院における病理医の仕事、CPC、RCPC

◎RCPCは現在、徳島赤十字病院で定期的で開催されています。職種や経験年数不問ですが、興味のある人はメールにてお問い合わせください。yamashitar@tokushima-u.ac.jp

※CPC (Clinico- Pathological Conference)臨床病理検討会。患者の診療あたる臨床医と病理医が症例検討を行う会。

学部長に“聞く”

特集「コロナ禍の令和3年度前期の振り返りとこれから」

生物資源産業学部 Faculty of Bioscience and Bioindustry

コロナ禍中における 生物資源産業学部の教育

生物資源産業学部長
長宗 秀明
(ながむね ひであき)



学生とご家族の皆様には、日頃から本学部の運営にご協力を頂きまして誠に有難うございます。お陰さまをもちまして、コロナ禍の中ですが本年3月には無事に学部第2期生を送り出し、また4月には学部6期生と大学院修士課程2期生の皆さんを受入れることができました。

昨年度から波状的に続く厳しいコロナ禍の中、学内クラスター発生からの教訓と感染第4波への対応もあって、本学部でも令和3年度前期は引き続き、遠隔授業を中心とした教育体制を取っています。昨年度及び本年度に入学した皆さんはこの状況が入学以来ずっと続いており、本来なら謳歌できる大学での学びやキャンパスライフに大きな制限がかかっていることをお詫び申し上げます。このような現状を受けまして、前期末には対面での学生と担任教員の懇談会を開催し、皆さんが抱えている不安やご不便を把握して対応策を検討し、その解消を目指しています。また、卒論生や院生の研究面におきましても、新型コロナ対策に細心の注意を払いつつ継続可能な場合には実施体制を取っています。現状では大きな支障は生じていないことや学生・教職員を対象としたワクチン接種の実施もあり、ある程度の明るい展望も出てきていますが、引き続き予断が許されないことから、状況を見ながら適時適切な教育体制を検討する方針を継続していきたいと考えています。どうか今後とも引き続き、皆様にはご協力とご理解を宜しくお願い申し上げます。

理工学部 Faculty of Science and Technology

コロナ禍の中での大学

理工学部長
山中 英生
(やまなか ひでお)



「コロナ禍」とよばれる大災害級の出来事が起きて1年半、大学教育も大きな変化を強いられてきました。徳島県は、幸いにも他県に比べて深刻な感染状況には至っていませんが、本学の学生が関係する感染クラスターも発生しており、決して安心できる状況ではありません。

理工学部の授業は、できるかぎり遠隔形式を採用していますが、対面実施が必要な実験・実習などの授業では、講義室の座席を半分にし、こまめに換気するなど三密を避ける措置を継続しています。コロナ禍で浸透した遠隔形式には、ビデオ等の教材を視聴し、小テスト等で理解度を確認するオンデマンド方式、教員とリアルタイムにネットワーク接続して授業を受けるオンライン方式などがあり、授業内容に適した多様な方式を選択することで、より学習成果を上げることができそうです。

1学年600名、全体では3000名を超える学生が在籍する理工学部ですが、8つのコース・系ごとに学年担任やアドバイザー教員を配置し、生活や学習の相談など、きめ細かなフォローをしてきました。研究室に配属された高学年や大学院生に対しては、指導教員が親身に対応しております。

大学は学生の皆さんにとって、仲間をつくり、多くの人々との交流を通じて、これからの生きる力を身に付けるかけがえのない場所です。教職員一同、コロナ禍の中でも皆さんが充実した大学生活を過ごせるよう、工夫に努めていきたいと考えています。